

十燕  
種石

淨  
瑠  
理  
譜

三  
輯

四

特  
1管4  
679  
24



特  
679  
24

燕石十種第三輯四之卷



竹本 豊竹 淨瑠理譜序

其和とありありぬるとも、若くはちる程波よありて  
此書ふも、ま紀を得たり竹本豊竹ふも、此園ふも、  
其ものせし、歌をみぬの名を、書し、福を、益を、傳、奇の  
種より、纏、師、舞、本、此、態、よ、い、も、ま、て、見、あ、つ、め、方、あ、つ  
然、も、諸、事、同、出、往、来、と、あ、る、せ、り、今、を、此、名、の、雅、な、ら、る、を  
惜、も、て、あ、ら、う、あ、り、竹、本、豊、竹、淨、瑠、理、譜、と、題、を、せ、し、淨、瑠、理  
年代記を、よ、い、よ、り、の、あ、ま、と、擇、び、て、精、う、ず、終、り、と、詳、な、ら  
ざる、と、な、ら、せ、し、

文化元年 甲子 仲春 叢書 杏花園 主人 牛門 記 せ どり せ たり

諸事聞書往來上

竹本芝居之部

銘人の作者近松門左衛門出生と近江國守親音近松寺  
御坊之より出家をきくは系統より居るを  
竹本荒後之掾より儀古丈より攝別天王寺村之出生  
井上操磨之浄瑠璃を好むを修好し貞享二年  
乙丑二月道頓堀西之芝居より座本中儀古丈と  
浄瑠璃操りを興あり

始之浄瑠璃

○世継曾我

五段續

貞享三年乙丑二月廿日

是系守始加賀掾古浄瑠璃之末  
同日二年丙寅二月廿日  
初日

○出世景徳

五段續

是近松門丸島市平儀をまゝ之新降福理之化とて光り  
此後近松氏系於仁居那後元禄三年庚午此正月  
系於より大坂恒毛と成りて光り元禄十年丁丑  
十月十三日

○百日曾我

五段續

右降福理ハ系字此加賀掾芝居して近松氏化りて國扇  
曾我とす外顯なるもか入して百日除りも初りたる  
是んごを以て國扇を百日曾我と改る義をま據り身は  
より近松が新降福理<sup>福</sup>九三十由りて亦是より此新降福理  
勢ありて此初操り芝居りて五十六日自りて  
を誓しとのこと元禄十六年癸未此五月七日初りて

茶降り

○日本五代記

切降り

○曾根義純心中

是近松門丸島始て世降福理の作臺古今此大ありて  
當月改元ありて宝永と改る市平儀をまゝハ此先年  
元禄十三年辛巳此より法領ありて市平儀後之掾藤系  
此博教<sup>いんぎ</sup>五十一輩 勅許をうりて此降福理を此  
宝永元年申の秋そ身在りてひききより井田出雲  
より塚中芝居の坐和と成りて人形衣袋道具まゝ  
をよりて此此近松氏新降福理出語り出づりて  
此事をよりて思ひ付たり右新降福理

○用明天皇職人鑑

五段續

大切鐘入のしん

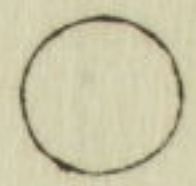
右丈竹本筑後掾  
ワキ竹本浪花  
三弦竹澤権右衛門  
辰松八良左衛門

おや久人形

是出得り出づいれもどく光之

まより時代津福理世話津福理さ句〜新曲を他せし  
ま〜丹波と他といふ津より宝永四年亥六月廿四日  
日して大入せしをま〜今正徳二年壬辰と〜三月廿日  
或度より返〜

新津より



けいせん掛物掾

二段目を

切津より



丹波与作  
園北小まん

待叔能小室為 上中下

此夜若竹政を丈道頓堀芝居のま〜のて出座右丹波  
と他丈序道中双六出得りしてお節と是より竹中政を丈  
と改名す然に竹中筑後之掾事正徳四年甲午八月中  
旬より病氣して終に九月十日卯年六十四歳にて死去せ  
らる法名の釋道喜天王寺南門をり此人道頓堀にて  
芝居身の外貞享二年母のと〜より當正徳三年教三十一年  
が津福理九十日史を撰りこをて得るを〜り此者いたん  
もん近松門た出のて

筑後之掾死後もわらり芝居振る富して津福理を丈

陸奥蔵を丈 竹中政を丈同頼母内道理を丈竹本浪花同

彦太丈田川源を丈長島重を丈右

右を丈入替をお節と〜月筑後掾死去後大當り津福理

○父ハ唐土 母ハ日本 國性父那合戦

五段續

番村吉茂  
十月十五日  
より有之

初正徳五年乙未より十一月朔日三年敵十七ヶ月初日星首より  
稀なる大入あり

此ころ後年宝曆以道頓堀東芝居より豊中敵前座徳園  
祭禮信仰記の淨瑠璃三年敵初日辰年敵ころおとる  
右國性父那役刻ヲ爰ニ出ス  
座本竹田出雲掾  
佐者近松門左衛門

初段 大席 竹本頼母  
中 竹本浪花  
切 竹本丈吉

三段目 口 内道理吉吉  
切 竹本政吉

武段目 貝冬シ 豊中万吉  
口 竹本頼母  
切 竹本浪花

四段目 道乃 竹本文吉  
口 豊中万吉  
切 竹本頼母  
久仙景車 竹本道理吉

五段目 竹本政吉

おぢ人辰辰松八良を忠立役人辰津心助十作同人五七是の孫人  
あまとも此初多くこゝ世々 自道理人としてつゝか定りあり  
此國性父那の續キ

○種ハ日本 生ハ唐土 國性父那後日合戦 五段續

享保二年丁酉二月十日初日

此時其大幕のこ小幕をとりめり引三代前吉田文三郎  
若年よりとりめり出初此初淨瑠璃國性父那合戦とい  
ちがひもあつて不継系冒して切曾根寄心中を附れ  
淨瑠璃お初来享保九年甲辰正月十五日初日

○將軍太郎 出羽冠者 関八劫敵馬 五段續

右淨瑠璃一枚うんむん系大文字山はてん四段目の道具團を

ひくけが二面此山大文字の道具建見奉之あり大坂中之此  
字の焼ハるんが悪しとせしむるがごとく三月廿三日  
南堀の橋通より出火して大坂跡々焼亡是より大坂享保  
の大火事といふ此年四月廿日あり同十月廿二日近松の左衛門  
おさうおのりしより竹田出雲極近松門左衛門の傳授法  
を除きをりしより津福理式三書此せしむる也

○大内裏大友真鳥

五段續

享保十年乙巳九月十日初日

是四段目兼道の身整り古今此類向連文堂の也くは  
かて享保十九甲寅二月初日初日

松田和吉奉

作者 文耕堂 三好松洛

○應神天皇八白幡

五段續

此竹中政右衛門儀をまゝと改名是より新津福理業平河内  
通の蘆屋道満大内鑑振八人形をいもかりとるとあり与勘平  
弥助平の人形を是たりをいもかりとる人形は獲働くやう  
振そのとをを操り三人然れ始とる

○赤松圓心緑陣幕

五段續

右は殿目なる入道此人形 三代奉 吉田文三郎つひもどめを肩に  
働しを細く此年儀を奉法願をあり竹中上総掾と  
執許

○天神記冥加の松

出語り

三弦 竹中上総掾 松田和吉次郎

右は松とて

元文二年丁巳正月廿八日初日

○ 御所櫻堀川夜討 五段續

此時市井上総極播磨少掾と改名又同十月十日初日

○ 大政入道兵庫岬 五段續

此津福理より合羽伊志事竹中兼徳と改名と名乗道頼  
堀を居るよりりて出給

同元文三年戊午正月廿五日初日

○ 行平儀剛能松 五段續

此幕後人といふまゝ行中出小と改名

同年八月十九日初日

此者 松田和吉 竹田出雲

○ 小栗判官車街道 五段續

此時竹中兼徳と改名此と改名と改名

同元文四年己未四月十日初日

○ ひろがら盛衰記 五段續

此附吉田文之俊。巴御前。取次  
松平。梅。松。三。徳。松。後。の。人。取  
次。三。徳。松。一。と。い。ふ。事。始。末。は。一  
四。代。目。十。代。目。も。是。を。考。へ

此時草屋平右衛門事竹中真と改名して始て出度右津福理

役割爰に後々

初段 五段續

大序 竹中播磨少掾  
中 竹中兼徳  
切 竹中兼徳

或段目

四段目

口 竹中内匠  
中 竹中百合  
切 竹中播磨少掾

五段目

三段目  
口 竹中嶋  
中 竹中兼徳  
切 竹中播磨少掾

竹中兼徳





竹本紋を丈  
竹本其を丈

鶴澤友次郎

同 平五郎

三弦

右お初此付錦を丈松を丈出座一是も出座りお初をさす  
大乃と

播磨少掾死去の後降福輝のまのを室の初版此切錦を丈  
或此切政を丈三の切此を丈三の切書を丈其介紋を丈百合を丈  
松を丈其を丈三の切も降福輝のまのを室の初版此切錦を丈  
鶴澤友次郎同平五郎人形吉田文三郎同平五郎同平五郎  
同平五郎同平五郎同平五郎同平五郎同平五郎

延享二年乙丑二月十三日初日

○ 軍法富士見西行

五段續

此新降福輝も惣昌も同七月十六日より



圖七九段を御  
于徳を御  
約取三弦

夏祭浪花鑑

九冊物

是處芝居よりゆりてゆり世話との九段續をどめ之は  
暑氣の氣をとり口目より八月を始て人形衣裳帷子を差せり  
是三代前吉田文三郎仕りて七冊目長町裏の版本どろ  
りて人形水をうらも事を思ひけり吉田文三郎之此人あやう  
りけり人形を扱むる人のとく右ね云りて役圖七九段を御  
一寸女房おきりてを使ひおろの次め今よ款拜始りても格棟の  
帷子黒襦子此前帯後黄の巾着なりとゆり印を差せば  
おろのやうにゆりぬもゆりぎすも圖七九段を御人形のわけ

あよあらす

筑後より御りてより人形頭を其事銘人として毎尾八を由と  
言ふ者あり今も操りては然る人とも能きうしを言由と  
いふが樂屋のふちや之此ハ多由一性より國性爺のうし安祈  
今よりいひ日中振袖始りてを此をの命の頭其年新降瑞理  
は身くあつぬうしを焼く一庭をねその名をいふとあつす  
大膳宮分及頭典軍淡くそ孔明より用明天皇けんびい  
頭を介人形頭の吳名敷志をす右夏祭國七の頭國性爺といふ  
款紋始りしを糸繫とあり落しめし花色のぎんげの  
綿入やぐんの紋三ツ目床の月より大鳥左賢右進のものを福ト  
ゆふ新しきものもあつすゆふの月よりあつたおとんとを  
若せ徳多由頭といふ此をのしを白ぬり厚子びんりて

絹のごとんど白を若し一田今國七此粒之此通の次ので  
あつた六款を女操りては國七徳多由とてす縁を居  
津く浦く唐土をも介の衣裳をやりかけは是と世國七  
多徳多由頭のうしとくくくく三代前吉田文三多銘人といふ  
下一釣船の三姉の安祈神の頭を白髪とあり赤山を色と  
ゆり照拂のうしとくく此れ凡そををつらんで居る紋不志と  
儀平次を新藤のうしとくく<sup>黄色</sup>の帷子今より於て新しき  
あつたあを板と押とくくく

△夏祭園七頭始條尾八ま米  
 國性爺合戦の和藤内ニホシ  
 ヨリ後調法ニテ三代前此文三節  
 園七ニツカワレシヨリ是ヲ名トヨビ  
 大園七小園七ニ通りアリ近江源  
 氏和田兵衛妹脊心鱈七ナドニ  
 ツカウ頭是ナリ

△同釣船ニ必頭細子人條尾  
 八ま米始國性爺安辨人此  
 頭ナリ此ノ事盛衰記此  
 船改権口為杯ニモツカヒ白  
 又レバ布代家市右忠ノミキ  
 ワルナリ桐竹勘十郎キ





△同三河屋儀兵衛次頭細子人  
 篠尾八左衛門是大塔宮高孫  
 左郎左衛門ヨリ薄雪伴賀守  
 菅原ハジノ兵衛忠臣茂九左夫  
 杯ニ巻フハ是ナリ三河屋儀平治  
 桐竹門三郎巻フ



△同一寸徳を樹細子人篠尾  
 ハ左衛門是日本振袖の始り  
 ソサノヲノ尊の頭ナリ雁金  
 文七千本の忠信武部源茂  
 ニッ桐梶原杯ニモツカフ古高  
 巻フ

右巻七此津瑞理改刻九之通り

夏祭浪花鑑

九冊物作者  
竹田出雲掾

竹中此巻

壹冊目

竹中百合巻

四冊目 竹中改巻

七冊目

竹中改巻

貳冊目

竹中改巻

五冊目

竹中改巻

八冊目

竹中此巻

三冊目

竹中錦巻

六冊目

竹中嶋巻

九冊目

竹中嶋巻

撰り既流りし秋舞妓の事や芝居表を教百中此のなり  
進む教を初りず東豊中西中と相撲のとり東西の  
別を町中通ふ心三をあらし撰り此らんおういらん  
延享三年丙寅八月廿日初

菅原傳授白鷺鑑

五段續

此津瑞理古く此丈入列して吉田文三の役管志中より白巻  
千代三役之菱相承て装束呈梅新若松と鑑今より秋舞妓  
も不整梅と松と撰丸三子ともさふ髪して黄色大羽内島八折  
知り形多きバ大坂を始國々とも三ツ子と見ず是吉田文三の  
仕始なり今秋舞妓は芝居して松を初り後者三原自時平の  
諸巻よりさうさう撰りて由もともさふあ〜右菅原此役  
刻りてゆ

菅原傳授白鷺鑑

五段續

作者  
竹田出雲  
三好松樂

初段

大希竹中此巻  
中竹中百合巻  
切竹中錦巻

三段目

口竹中百合巻  
切同此巻

武段目  
 口 同 紋を丈  
 中 同 寫を丈  
 切 同 改を丈

四段目  
 口 同 巾を改を丈  
 奥 同 綿を丈  
 切 同 寫を丈  
 五段目  
 カ 同 巾を改を丈  
 十 同 其を丈  
 合 同 松を丈

右淨瑠璃五段目時平や人形相巾助三喜丸五桐巾門之女房  
 八重山巾伊平次お初道具を左右引ひれ天満宮のら右  
 ち平のん、勝り多井お垣石焼籠も細工英をそく、袴の内を  
 菱相通の人形をうごり巾巾此を丈巾巾高を丈巾巾改を丈  
 そ介のち丈神をの改を丈ををすをあをの目あり  
 びく思ひ賽珠山のくくくあり此細此人物あり  
 心直あり

吉田文を神、お宮通相の人形をきつて、毎節別火を合、水

あび星を初む樂をて右人形流薦をき酒をさげ  
 神のくくくすくくあり大席初る此を丈も初日より  
 七日吉田文を改とれあり、情を初めつと子節より舞臺  
 せんちあり此細あり初者より五段人余も一坐あり右  
 物事自由あり秋天此頃巾巾芝居あり、ある節再建やし  
 娘少松子の月夜の淨瑠璃を春娘少松と増補、今此頃何  
 改を丈三段目して初、お探り好きの秋あり、初より見物  
 あり、ふを初め、不入と云あり、大席の人形改を丈、  
 人形改を丈、ひのよさ、是の折ワケ掛高と云、おを丈、人形  
 の首此働さいせん、おを初、舞臺より人形をひき、人も不人形、  
 の付、十二、此おを改をかい、くく、く、後より、おを改  
 りの、く、く、の、見物、思、く、く、く、く、く、の、ほ、く

由一右大席を初らたまふ代目の約をまかりし生約をまかりし  
信をまといひ此者ひたひたをそし大席を治りしふふ場ふい  
がくん物あまこと舞臺よんま人も人ありみすの合より  
みそ彼場はとくばたといひり樂屋して大おん顔面といひ  
いうみ奴くうやあたままどや連んをそし一苗を附初居大  
席此人形を人も樂屋よりふお皆々竹のつらさし初の時  
後よりういあや人さしゆさづり思ふあまでも事か海を  
つらりひーヨリはれとりありとたまはりたまどもお暇を  
いぞす者もあー顔面は豊松承之郎連大のすぬあり生約をま  
形どりてあふ後ー皆々お暇をいひいひいひいひいひ  
てーあー後よりゆさづらたまりの人形をひが持て居ると  
おのふか能といふる生約をまをせよとらふ承之郎を東の

きくもの若井田とてぶらぶらと若井保之郎の事を思ひ出  
大わいひいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
あふらとあり不景氣なるも右若原の大席の侍と初年か  
もと立春此大席といふんでいなんのさしおさるてー  
お置菅原保授大のりいいいいいいいいいいいいい

延享五年丁卯八月廿二日

○ けいせい枕軍談

五段續

此竹本文字をま同信濃をま竹本紋をま對座る豊竹

は新浄瑠璃不入して同年十月十六日より

○ 義經十本櫻

五段續

此浄瑠璃古今此大當りして大つりあり

右段刻たて通

此時六文三十六文にて三原國の権  
儀盛ん脚をきくすまのりいいいいいいいいいいいいい  
冠形はあし緒然る進を後あり

此時若田文三命海野甚長為り  
人形をいひいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
付てありいいいい

作者 竹田忠雲  
五段續



義經千本標

五段續

初段

大序 竹本此を丈  
中 竹本信濃を丈  
切 竹本解を丈

二段目

竹本嶋を丈  
竹本此を丈

三段目

口 竹本百合を丈  
中 竹本文字を丈  
切 竹本改を丈

四段目

竹本此を丈  
竹本信濃を丈

五段目

竹本此を丈  
竹本文字を丈

此付吉田文三郎及渡海屋銀平兼屋孫九郎依及忠信三郎之源九郎  
狐の人形廣袖より是之源氏車の模やうきんごりの九解人形頭  
そき此をよ此付もどめて耳の癒く仕をを思ひけし之源九郎

右源氏車の模を付しぬあらず此飯うん家初より狐と  
んをさる事友のつけますいふう工まを前右狐場  
をつもむる改をまの紋右源氏車を源氏の田よりして源氏車  
の模を付しぬ今も款舞ぬ杯永と下して仕きともごと  
そのとらむる此改をよあは源九郎狐のうす是も二代前  
吉田文三郎仕給へ何とすも此改をよあは源九郎狐ハ  
ゆきぬ一幸号改元あはる寛保元年戊酉八月十日

初日

十一冊物

作者

○ 假名白本忠臣藏

竹田出雲  
三好松洛

是より近松門左衛門他々  
盤右平親より竹本源箱  
裡あり

後刻

此付竹本友を丈出雲

初段

竹本此を丈

六冊目

口 竹本友を丈  
切 同 嵩を丈

六冊目

竹本百合を丈

三冊目 口 中本 信濃を主  
 四冊目 口 同 綿を主  
 五冊目 中本 改を主

七冊目 熱力ヶ合  
 八冊目 中本 文を主  
 九冊目 同 信濃を主  
 十冊目 中本 此を主  
 十冊目 中本 綿を主  
 十冊目 同 改を主  
 十冊目 中本 文を主  
 十冊目 同 改を主

新津福理の坊つら 京今の入形をどおし 大りありて當十  
 月より此を主島を主百合を主ある主對座あり 東豊井城前  
 そき居くお偉し なる物のを主多し 出せし 事ありは是れ  
 不及替り後して改を主綿を主東へ入替りし 十賀を主長門  
 を主改を主事と認を主と改名円通を主事此を大隅極と受願  
 此人教してせしり 忠臣義を同年十月をとお初十月は同してせしり

替り後にもお思當せし ひとしみの程を能く之断りあるう此忠  
 臣藏款拜ぬりての大銀のどしひして三ヶの津立物を役者も由家扁  
 身と定也 近世國々すども忠臣蔵の義ありても見あらずある根  
 柵といふことより後より新津福理の文句を主備し 大層の大切を  
 幕引すおといふこと仕きども古しいし 見おもひする忠臣蔵  
 形り是より後忠臣蔵の増補料々新津福理の書ども古えの假  
 名を中へまきりし 一ある一ある奇妙なる新津福理あり 同十月廿二日  
 初日

蘆屋道満大内鑑 或も自ら返りしと想おつる 入あを忠臣蔵  
 六つつかうねをす 是もお体の寛延二年己四月十八日 初日

○ 栗山真 繕嫁入雛形 作者 三田山雲 五段續

此付のけさ事、竹中  
細末と改名初て出  
是今道頓堀極家  
先祖あり

大切出語り  
竹中 大隅掾  
同 千賀末  
鶴原 有次郎  
ワキ  
三弦

此序福屋もありし不入り同幸六月日てお休む七月廿四日より  
初日

○ 雙蝶々曲輪日記 九冊物 作者 竹田出雲 三好松樂

此序福屋飯向の能くもど夏ありと同幸忠七の徳を忠を  
前髪せしやうかねとともありしああり此飯向歌舞妓  
よその長吉長五郎連大入をあり今も歌舞妓の能くあり  
擧り少の除りしとさずは付三味線舞座あり為久同寛文  
二年十月廿八日初日

○ 源平布引船 五段續

序切錦をま武切上徳をま此付病久三院目政をま江原目大隅掾  
是之實國四々人形吉田文三院人のめくん白る吉田才次郎尾十郎  
本曾よりこの役初りまし武院目よりこの人形を舞  
具をあるがしをわを忠七の飯向は昔澤村宗十郎の油斗  
の仔細新九郎の仕目を寫さんまど歌舞妓よその人形を  
擧りよその大勢然り思きよをいづる有るあり見し  
女流も名人形もとも文三院をともありあともあり  
同三年キ七月國姓爺合戦は度目武院目より虎が皮高張り  
眼杯も勤きあり久仙山大隅掾の千賀末をま三味せん登壇在  
あり同幸十月廿四日初日

○ 文武世継梅 五段續

もかりし不入此付武代目より紋をま始て出座

寛延四年未二月初日

此時後文三役  
吉田冠子改を  
吉田冠子改を  
吉田冠子改を

○ 癒女房深分の綱

土丹物

右津福理五目吉田文三郎道隆寺の所作ワキ吉田甚五郎右鼓  
相中助三郎苗高吉田文三郎大鼓吉田次小鼓相中門三郎是  
迎奉の出入

右癒女房吉田文三郎の役定て進重の井二役をせひせん張場  
樂屋に休息して居るに吉田甚五郎人形多し形多し形多し形多し  
平信を履くあげ居すと云ふ事あり人形をとる者あり文三  
郎見兼此人形をとらん初日わく居ると云ふ事あり平信の人形袴の  
しをうづけらるゝ事あり思ひ入をせしむる事あり  
一やふふと云ふ事ありほのほの文三郎つんとんうづせしむる  
事あり今より秋年始ると云ふ事あり秋波世思ひをせぬ

右癒女房の津福理昔近松がう  
丹波与作の吉津福理を指補ふ吉田文三郎冠子ありうづせ  
をせしむる事ありと云ふ事あり

同奉十月十七日

○ 役行者大峯様

五段續

此付大隅縁大和縁と改名す其より津福理式三郎不入奉号改元  
宝曆との此三年酉奉東より竹中春吉文同陸吉吉未り同奉

音音

○ 愛護雅名款勝因

初段  
中段  
後段

此津福理道心の際春吉文吉ありて是絶名をあげて舞其一面  
水の取ると道具をかりて置てまより吉津福理新津福理式三郎  
あまをり置て置く

此時吉田文三郎を役  
初段  
中段  
後段

此淨瑠璃或口連松  
半二姑七他者より  
思ふべき

○小野道風青柳観

五段續

此時傳法源七事竹中深を父同家たまうりて出坐三ノ中深堂  
口の家を父形初座あると初めりて後傳を取ハ淨瑠璃松宮  
能友今のたまふ事之右三ノ中深を父の三味線松宮長孫と  
之ハ口連松を父と市心助を父とす古淨瑠璃新淨瑠璃  
拾遺傳云月平惟茂凱陣紅葉姫小松子より松姫ヲ山島武勇  
同答傳り此相撲あり此淨瑠璃三島餘大つりて跡ハ不入也此初ぞ  
りあわつて大和極吉田文三島を居を父の家曆六年丙午二月  
初日

○宗徳院續政傳記

此時棟中續命を不理を出廿中を父と改名出坐  
宝曆九年乙卯二月初日

○日高川入相花王

五段目

淨別能大入せり同月皆居於燒くて連さゆ候り家を  
九月廿百よりせり日高川に候目々切ま

大切 用明天皇鐘入之段

出語り 右丈 竹中政を  
ワキ 同 條を  
人形 吉田文吾

右文吾と武代目々吉田文三島是連も親ノ續名人あり此時  
撰り好名昌成ハ親吉田文三島傳文吾を介するを父をうり大西  
其居りて撰り身ありせんともありし連座本島を  
候く挨拶人ありて思ふべきこととせり右吉田文三島傳  
系初々其居を初傳文吾祖父を名をつぎ吉田三島を  
改名同年九月十六日初日

後新象丸屋文彦  
此中後主と改名付  
始中場より出

○ 太平記菊水巻

五段續

此付中春をまにヶ暮より岬を始て出坐此後瑞理大入りて免角  
春をまにヶ評判せん〜官〜宝曆十年辰五月六日より五十日  
弓播磨掾拾七回忌遊苦ひ〜うね盛衰記お初ら同年七月廿日  
初日極彩色娘扇帷子衣裳して久ねを續て大入也是より新澤瑞  
理古澤瑞理入勢〜出せえ不入して多根暮新地を居る所  
引城あり〜も此ら細々ま平賀島本助事 泉倉三右衛門事出初宝曆十一年巳十月廿一日  
冬龍溪苑の梅人秋顔見世吉田三希を由吉田文三希と改め  
江戸に吹乞萩の月十日初め是も大入り此初を居る〜近頃  
死せ〜も〜中田近の大掾を居銀を〜中田出羽中々市を  
江戸に仕立此人既〜も〜大坂中銀持も人扱も月合  
同年十二月年忘遊致下を遊してそ人を遊せ一教よは居る此作を

唐よれひて人〜も〜んせ〜も〜た〜り〜長せ〜れ

御公儀より山原方より遊の大掾鉄屋行果田中氏あんど入宰〜と  
あり此付中中澤瑞理ハ古戦場鐘懸松五段續此最太坂町人  
御上より五千兩々用金を家〜中月ら〜を〜おさ〜  
古戦場鐘懸松を五千兩金借を待と催〜も〜せ〜も〜  
夫も後あり〜お海皆〜出宰ス〜古澤瑞理をい〜御宝曆  
十二年午九月十日初日奥列安を京五段續同十三年未正月九日  
中田三希居出火二月廿中三希居〜澤瑞理操り子供一切十文  
〜お遊遊〜も〜あり〜大入り

同辛四月十三日初日遊の大掾銀向〜

- 初 山城國富生塚
- 日 後 天竺徳兵衛郷鏡

五段續  
五段續

作者  
近松半二  
中田三希  
中田出雲  
三好松樂

右毎日入替一日替り此付巾巾生約を夫始の出坐此淨福理を家  
不乃りして同八月三日初日

浄福理

○諸葛孔明鼎軍談

武隆目迄

○御前勉り淨福理相撲

右六巾巾豊巾々淨福理を毎日く三限り組合勝負を自々事相  
撲の趣向之舞臺のこやぐをいひく去儀を勝り行司人形出で  
擲りく古實をいひ是より道具九右用く東西の擲り始りききて  
そり西の國性父邪東の信仰記能き場を一限迄合毎日替りあり此付  
巾巾大和極一世一代して三味線浄福表八毎日替りを初り翌年申坐  
中不残江戸表へ引城尚中系於一座来

宝曆十巳年申九月廿八日初日

○京羽二重娘形氣

九冊物

因々家書中凡々事  
未だ巾巾を居る候は  
り多人あり此付初り

此付巾巾圖を夫々下のり大坂へ来る此淨福理初入りて暫き居  
休同年十月廿一日座江戸表より初り十月十七日江戸表元と愛  
敬曾我類見世程之教音昼暫お初同十月廿三日辰目

○假名も巾忠臣蔵

十二冊物

竹巾圖を夫々九限目を始り初り

此初と改元ある昭和二年酉二月九日初日若東者待新田系圖席  
田喜右丈武の口圖を夫々切深を夫々三ノ切改を夫々口口綱を夫々代  
吉田文三の口口座頭を夫々口口中音を夫々三ノ口口切綿を夫々同年  
五月十五日初日御多禮初圖車操是大坂宮々の系を淨福理の  
是初より或る程波系の御所操骨操場福系多の子巾振場  
天神系多の葛系三限目といふ趣向之當七月十日改を夫々死々夫より是居  
限く不替昌して新浄福古浄福理も當りのあり巾巾仲を夫々初

をいづもき居而くは初年同辛十二月仲をまの戸の初初和三年  
戌三月十宿初初初をまを抱東より島をま鐘をま出望る位年ま  
京より出出初年初初初者五版續序切位をま或白綱をま或切位をま  
三白鐘をま三の中係をま三切位をま三切位をま三切位をま三切位をま  
三切位をま三切位をま三切位をま三切位をま三切位をま三切位をま  
まより古降瑞理初降瑞理二小次中心鐘由未親沖等為地五席  
巾半組をまと改名始て出望

此降瑞理も不入り同十月十六日初日

○太平記忠臣講釋 九冊物

作者 竹中三右衛門 板田むく  
近松半二 三好松治  
八民平七

是忠臣降よ海より〜と大降判大入り之同曰年亥五月五日

初日四天王寺雅本像五版續をま三不入り同辛六月十五日  
三夜月夏糸浪花禮是も三不入り同八月四日  
初日初。花軍壽永春武版目之後。因取千両職を初  
空新降瑞理あり〜とあり〜不入り是漸く京初中  
儀をま座と入替り同辛十月十日京初一坐綿をま園をま  
春をま千賀をま

○石川五右衛門一代傳 九冊物

是款年及他者並正三之他之降判をま三不入り〜京座  
おげゆら初の事之是より尚〜京初ゆり同辛十二月  
十四日初日

○泉別小田居茶家 三日太平記 九冊物  
撰別天十茶家

此時竹中をま改をまと改名〜江戸よりゆら亦〜をま野をま



出産恒ち夫江戸の以是水もあや終に市儀をまより筑後極  
あり貞享二年より明和四年を八十三第回中本芝居をんてん  
せし事世の盛衰といふありは是非もあや  
當十月より座中山下八百藏といふ名をよき是より秋并女芝居と  
ありし事一兩年あともたししと夫がまゝありたり再建す  
をとも中芝居と取りまゝ秋并女と取り今を筑後芝居大西  
芝居ともまぎらひしきい是非もあや

明治二十二年仲夏

筆者

妻木頼徳



### 諸事聞書往來下

#### 豊竹芝居之部

當流名人とゆきし豊竹誠若少掾出生の堂也豊後之家  
衆中元と河内為勅右衛門といふ貞享の頃井と播磨守治  
加賀中本筑後先陣まゝ津瑞理を能是悟一豊竹若若と改名  
一國を修治し系録陳南紀別といふ自身芝居を興せしむ  
其後元禄十五年壬午より道頓堀立寄町にて始り津瑞理を  
興せしむ或三喜と申す井と宇治抄と古物定記海音  
といふ此者和別栴本寺の諸家傳といふ俗といふ大坂の住居す  
此人をとりて豊竹座といふ新津瑞理の作意をある元禄十五  
年壬午三月十一月初日

○けいせい懐子 五段續

仙者 紀海音

同五月廿八日初日

源氏

源氏烏帽子折 二段目迄

○金屋金五郎浮名額

是より新降より數々差出るといへば中々居此意旨  
淨瑠璃印額も今も残りしに中々ありといふ皆近松の  
が他意之豊作の形物多しといふもげにありしに  
をらんあつていづぬ大入せし井筒屋源六郎の寒晒の世話淨瑠  
璃元禄十六年癸未正月七日是より宗良紀別帳を介近國  
を多くしり享保三年を元十七年を以て當り淨瑠璃の形  
百人一首増補依々大鏡泉別枕初格身替台各増補日向景  
清淨瑠璃古今席男色加茂待富仁親王嵯茂錦小夜中心  
夜泣石油屋おその袂白紋わけくめくめく

○けいせい國性父邪 五段續

他者 西澤一鳳

此淨瑠璃の作中芝居國性父邪合戦をせし物に取廻れ言筋を  
おがし事して近松氏の他をあげし思ひ付之是も不介  
といふ系は廣く一座引越え是よりおもひしに新淨瑠璃  
敷く中

○鎌倉三代記 五段續

他者 紀海音

享保三年戊戌正月二日初日世傳の中中若者主事受願あつて  
豊作上総お孫藤原重勝とある世系表代を了るまは文去ま  
出勤す同年八月朔日初日傾城吉原雀義經新高館神功  
皇后三韓龍衣伏見常盤昔お格大友王子玉坐靴心中二腹帯  
建仁寺供養是迄新淨瑠璃とありしに大入介不介より新  
淨瑠璃ありしに

享保九年甲辰二月初一日

○ 頼政追善此柴

五段續

此年正月日あり源を更鶴津九月出勤又當三月廿日南堀江橋  
通より出火大坂中妙く焼亡又是を享保大坂の大火事と  
云豊州芝居も類焼二月堺南此芝居も亦多根焼新地  
此此伏保古市の芝居引越九月下旬大坂の火事より此の東  
芝居倉地を求め芝居新築新造芝居して享保九年  
辰十月十六日初日

○ 女蟬丸

五段續

此御より芝居大入りして他者紀海音西岸一鳳お田軽文  
並本宗楠若の面々々々他意をふす存今も妙き  
降りののけごいあり昔米石通南北軍同善多留り降

大佛殿了代礎此新降福理お慈了大入享保十一年丙午正月  
八月初日

○ 北條時頼記

五段續

右降福理の竹中より近松の左馬也西の寺殿百人上為増補  
日と五段目より後ハを修り右段刻を出入

北條時頼記又後續

大序 豊州上野少格

道行 豊州上野少格

初段 中 同 新右支

三段目

切 同 源右支

奥 豊州春代支

武段目

切 豊州春代支  
同 出水支

四段目

口 豊州春代支  
右と同 出水支  
中 同 新右支  
切 同 出水支

五段目 五の物

出格り出せり

古丈 豊竹上野少椽

ワキ 同 出水古丈

三味弦 野澤 春八

人形出づる藤井小八希同小三希豊松友五希中村彦三希之  
此降より古今此大つるを同十二年丁未二月十五日初日

○ 清和源氏十五段 五段續

五段目出格り

古丈 豊竹上野少椽

ワキ 同 出水古丈

ツレ 同 出古丈

三味弦 野澤 春八

出せり人形友井小八希同小三希近中九八希中村彦三希之同年

八月十五日初日

此附入藤井小八希同小三希之  
の人形口を以て  
細工を仕切り  
八五九の人形つらみ  
自述事柄の指を勤くを細工  
岩流の人形眼をふさぐ事を細  
工是了り豊竹の古丈也

大切ありうらまは候

出格り出せり

古丈 豊竹上野少椽

ワキ 同 出水古丈

三味弦 野澤 春八

出せり人形藤井小三希此新降瑞理大つりしを同十三年申

二月初日初日

○ 尊氏將軍二代鑑 ○ 南都拾三鐘

是不入りしを古良を厚く行享保十四年己酉正月二日初日

○ 後三年奥州軍記

是日入りし同九月望ありし十月初日

○藤原秀郷田原系圖

享保十五年戊申月廿日初日

○蒲冠者藤戸合戦

○平形檀特心

同辛八月朔日初日

○楠正成軍法實録

此時近元九八和田七の人形眼の動く事を始りしより

○和泉國浮名溜池

○酒吞皇子枕言葉

同辛十月十六日初日

○赤澤心伊藤傳記

右新降堀野の天満橋森三吉門と云者始りて是の表く憐

進了す當九月廿日ちまえ上野少振事豊井城示少振藤系

重泰と改名す後儀出語り蓬萊心お勤やん是より

○八百屋お七恋綴巻五

○お初天神記

右世活物式三巻之入りし享保十九年甲寅正月二十日初日

○北條時頼記

此時と麻心ありしを横く表今ふととあり同辛

八月十三日初日

○那須与市西海観 五辰目

此新降堀野大乃りし享保廿年乙卯二月廿日初日と書出の表

介類 即より即後あり

○南無鉄後藤目貫

表振らんを引同二月十二日初日或後目

女豊井上野少振

ワキ同 出水表

三弦井字後四

切出語り 茶目

○ 清和源氏十九段 切出清り

右丈 紙筋か椽  
ワキ 河内右丈  
ツレ 倭右丈  
三味線 井原右口段

是より八月十月初日

○ 荊菅直桑門紫紫輦 五段續

此特播磨屋孫之所豊中約を丈と改名よりして出世同正年  
辰三月十二日初日

此時とんぶの形を孫井  
小公并考す常の形は人形  
よりかきうをいふけくす  
也  
○ 和国合戦女舞鶴 五段續

此淨瑠璃丈入して氏年年号改元あつて元文元年とある同二年  
己七月廿日初日

金五右衛門と形は色  
赤くあると云ふ四五  
人形は近世九段と云ふ  
也  
○ 金洲雙級巴 上中下

此付綿武事初依を丈始て出度又後綿を丈とある此新淨瑠璃

丈入して元文三年戊午四月八日初日

○ 丹生山田青海劍

右淨瑠璃九月六日とある初は後芝居大徳と有是を建連し普信  
成就すて芝居兼芝居一産引り 和国合戦と徳の緋花を  
を初芝居芝居成就 九月十七日より新造芝居と云丹生  
山田をお初と初形毛祝後淨瑠璃丈今序を丈紙筋か椽は倭を  
約を丈三強中沢は右口段同十月八日初日

○ 苗保野中強井戸 ○ 狭衣衣紅鴛鴦銀羽

此付若井赤と云ふと云ふ此者出生八田島所より子枕といふ  
入齒医薬を商ふ松井右右恵といふ者の伴名初付より撰り人形を  
好三代赤右田文三右を去んといふて風俗をいふといふ後人形  
大進者と云ふは新淨よりいふ

○ 鷗心姫捨松

○ 平田義光日本鑑

○ 武烈天皇儀播磨四卷補

河内志事 跋の志事下改名同年九月十月初日

○ 田村磨給麻合致

此付内通志事出勤當をより志事元紙前少椽約志事暫く江戸  
豊中肥前志事行同九月寛保と改元同二年寅三月甲初日

○ 百合推高藤軍記

切宮嶋八景出給り

志事 豊中内通志事  
ツレ 同 文字志事  
三弦 聖徳寺八景

同年八月十月初日

○ 道成寺現在鱗

五版續

此付紙前少椽約志事江戸より得る此降より不令と此名

南朝の紙同三年亥月十月初日

○ 条仙人吉野椽

五版續

是よりありと之乃とて年号改元あつて延享元年甲子四月二十と  
お前右条仙人五版目の市川海老花鳴神と人との尾と菊五版雲  
の芝とまお前とありと大入のせと左右の志を撰りふと一○条の  
志事花増と増補ありと志事元紙前少椽内通志事約志事和紙志事  
惣合と志事右条と志事此大ありとて續て四月十九月初日

○ 潤色江戸系 是の惠の排振の増補とて並は志事補の他文

同九月十月初日 ○ 柿本紀傳心旭車五版續 此付春志事出使

是より新澤福理四五巻あまともありと不のり延享二年

丑十月三月初日三度目 ○ 北條時頼記 五版續

早朝武三番出せり豊松左五版同派三節若井志事此付在年

豊州紙幣少掾行年あり五十一と一世代を和比内匠を更事  
改名上野掾重子の院の口を借り三味線監修者八人形出をイ  
友井小公卿同小三郎若井東三郎中村勘四郎出をイ也同三年十月  
三日多勢として紙幣少掾一世代を勤行浄瑠璃を○ 余他人吉登  
後之同年十二月九日新浄瑠璃○ 花代殿流島同日辛卯  
二月十三日初日○ 裾室如梅殿此付上総をまお初同年三月四日  
初日○ 萬戸將軍唐土日記 此付豊州鐘をまお下りて出座  
同年七月十五月初日

此付北条氏海音寺  
石碑法華寺と云  
和葉の法花寺ナリ

○ 悪源太平治合裁

五郎續

此浄瑠璃切上総をまお初操り人形としておどろ産願あり是  
若井東三郎又まおてま役人形に展風といふことをとりける展風  
といふ五郎の田びを向けておどろ役としてつづひのどろを是を

展風といふ作中豊州ともよおぬ人形少多かつともま役少  
此度始とともありふくろくか着て是を指先つとて連敷の  
子といふその人形どくく西引せん東ハ小猿連遠ひさ  
板突と九とふ片板もかく東西の流ありつづみる連田び  
舟中勤くのもあり是も東はうで首勤く西はうでらび  
勤うすその人形をひの黒ぶらり茶の多りやもり  
お合せえいびりの合相のどく左右のうさよと然る顔巾  
も西しての耳をおれど東ハ耳くてもは終之亦る袋とて  
田びよまあるめりやまの如きりの舞其まら結もかく東  
西して舞う人形うらハ市中座毎尾ハ多あよりいかに  
名ありを細くしつづひの終るもとも豊州ハ元禄年中より  
くゆりく人形顔とも名細くあまごも何の浄まりの何終る



以事をゆす若井東二島出格より西の段を写しつと遠い  
 さきつ左は柳より人形の段の名當り淨瑠璃と志るがひあや  
 かりせしと是る相並延享五年戊辰正月二日初日は付折を支出  
 ○昔秋舞妓の男達 容競出入に淺 九冊物 他者 並は丈助  
 今操られ女をて  
 是大方りよて秋舞妓足船の程を写せし新淨瑠璃之同年  
 七月十五日初日

○東鑑御將卷 五段續

此年を夫え泉別傳より一世二代お初り ○北條時頼紀色の段  
 當年辛号改元より寛延元年戊辰十月十日初日

○攝州邊橋供養 五段續

此附井本芝居よりは古丈島古丈百合古丈友古丈出初約古丈  
 江戸の初上総古丈是古丈元古丈春古丈市初古丈新淨瑠璃

役割

攝州邊橋供養 五段續

大序 豊井島古丈  
 初段 中 同 鐘古丈 三段目  
 切 同 伊勢古丈  
 口 豊井河古丈  
 切 同 此古丈

四段目  
 豊井友古丈  
 同 餅古丈  
 同 夏古丈  
 同 豊井鐘古丈  
 同 餅古丈  
 同 夏古丈  
 同 伊勢古丈  
 同 宮古丈

五段目  
 豊井將古丈

同二年三月三日入家北、新地白人トシといふぜんせい女弟  
ありしが去家後方の客に根付せしむる八重と名を起す  
天満老和所を去りて其宅と別るは八重酒を呑ば前後を去り  
志する事いふきが病之見ふ縁りを結て流せしむる言を述と  
いふ者あり此者山直りのゆえに妹ふ意志あり酒の事を  
異るんせしむる或は言ひ暮り兄弟喧嘩しむる事おごんまの事なり  
兄去る事いふを負す事あり入家ありて言を述しむる寛  
延二年己卯三月十日大坂中引寺一千日寺に獄に別るは時  
南新家貴福を去りて流す事といふ方の女良園といふ者大坂  
寺町大子の丁推よりありといふ者と西横堀にて心中をなすは  
る中心を縁理して神斎に控て出たる流の十吉恵といふ者  
多々の馬士と口論ありて別る事三月十日十九日のこと

同日に介類看板を止

新津瑠理

○ 攝別流色搦供養

大坂より二版目迄

切津瑠理

○ 八重霞浪巻演萩

七丹也

右新津瑠理のこの版向も三月十日十九日の事ありしを  
亦々よりらんらんいづくは初自古今稀なる事ありし  
と大坂中あどつての流刺は是れ志並ふ事ありおきい  
るま操り申敷を日よ法をその出格若代より人のことと  
大坂を去りし事及追ふるも大方をなせしと右と  
の板刺形のなり

八重霞浪巻演萩 七丹也

うせの版

豊井橋を止

七丹目 切 同 頁合を止

道行

七丹目

豊井橋を止 同 橋を止

武舟同 若林巻の辰 豊州此巻

繪巻の辰 豊州此巻

三冊目

切目 伊勢巻

五冊目 十里寺の辰 同 左巻

六冊目 都下巻の辰 同 嶋巻

同 此巻

同 頁巻

七冊目 神善の辰 同 左巻

口ケ合

同 阿巻

同 嶋巻

豊州年の大入り 是七月十日より切目 撰り大踊り 雀巻羽お  
下踊り 伊勢おんと新巻 是道頓堀島此日 巻  
無あんどうと巻くとも 是日 同十月十日 初日

○十帖 原氏 物巻 太良 五巻續

此時 鶴巻 仇巻 八巻 巻と改名 是より 此巻 約巻 是日 伊  
より 伊勢 巻 是日 是日 九月 此巻 是日 是日

初日 豊州 筑原 少巻 原巻 是日 是日 是日 是日 是日 是日  
後巻 出巻 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日  
年 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日

同年 八月 七日 二夜目 ○ 和田合 戦女 舞巻

此付 豊州 巻 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日

○ 玉藻前 巻 此巻 瑞理 不乃 是日 是日

○ 浪花文 章 夕巻 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日

撰り 大踊り 同年 十月 十日 初日 ○ 日蓮 聖人 此巻 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日

此付 百合 巻 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日 是日  
改元 あり 室暦 元年 辛未 十二月 十二日 初日

○一谷嬾軍記 五段續

此所豊井八重吉丈時吉丈と及名後の此吉丈是之此新降  
 瑞理吉人並は家捕三辰目を色似せしを置しを四辰目を  
 色似りしす

一谷嬾軍記 五辰續

初段	大序	豊井筑前守	辰目	豊井筑前守
中	辰目	佐藤吉丈	中	辰目
切	辰目	薩吉丈	切	辰目
口	辰目	時吉丈	口	辰目
奥	辰目	若吉丈	奥	辰目
中	辰目	友吉丈	中	辰目
切	辰目	約吉丈	切	辰目
二辰目	辰目	佐藤吉丈	二辰目	辰目
三辰目	辰目	筑前守	三辰目	辰目
四辰目	辰目	佐藤吉丈	四辰目	辰目
五辰目	辰目	時吉丈	五辰目	辰目

此降瑞理古今の大入りしを翌年申の盆より大切に操り踊りを  
 附る室暦二年申十二月七月初日

○倭假名在原系図 五辰目 此時若井赤二辰目

の人の形をきし類思ひ付おるはたふりし要し右降瑞理  
 大入りしを同三年酉七月廿八月初日

○男結助助真 是不入りしを同十月廿二辰目

○荊萱桑の筑前系此所豊井十七吉丈始る此辰目

成二月廿日初日 ○相馬太郎孝文緒序切鐘吉丈二切約吉丈

三切筑前守椽口切若吉丈大入りしを同七月廿九日初日

○義経腰紙状 三辰目を

○釜淵雙級巴 二辰目を

右腰紙状の新降瑞理の享保の頃 御上より若苗ら

南蠻鉄後及目貫を頼朝時代の増補一是を出す同十月十  
 五月初日 ○天智天皇荊德庵 此北時伊勢を丈に戸あり  
 降り新古夫と改名所を丈に戸あり室暦五年亥四月止日  
 初日 ○三國小女郎曙橋同七月七月初日 ○雙扇長柄松  
 此障幅理不入りと一座障へ引紙又同年十月初日初日或夜目  
 ○後三年奥別軍記 是といぐれの大入り少く室暦六年子月  
 十八初日

○義仲勲功記 五版續

序切鐘を丈二切約を丈三切籠糸少孫は切若を丈大切  
 ○乱糸枕並臺 若井小八郎出づる座中不強出語り  
 同年年十月初日初日 ○甲斐源氏撰軍記  
 ○写經是利條 ○前九年奥加合戦

右新津福理丈二の入りと同年八月初日初日

○信和源氏十五段或夜目は時豊竹籠糸少孫一世代  
 出語りを節

山伏接待の座	若夫	豊竹籠糸少孫
忠臣幡とらへ	ワキ	同 鐘若夫
	ツレ	同 時若夫
	三味線	鶴沼寛次

人形出をイ若井小八郎同小三郎豊松派三郎中村勘四郎  
 は時時を丈三幸豊竹此若夫と改名此御人形を立者若井  
 東二郎豊松東五郎同孫三郎若井小八郎同小三郎若井  
 伊三郎同新十郎中村勘四郎是ら出精ありとあり各人の  
 初之同年十二月五月初日と中村勘四郎といふ人新津福理の代意

○祇園祭禮信仰記 五版續

大内親方正三の鳥  
 五郎亦如顔  
 細人篠尾八兵衛  
 是行平  
 此兵衛  
 御所様  
 高様也  
 夏祭傳ハ  
 ナグニウカヒ  
 ナハ夕百シ  
 是ナリ  
 是ナリ  
 是ナリ



用明天皇  
 ケンビイシ勝船頭  
 細工人篠尾八兵衛  
 是傳書  
 妻平  
 菅原梅五  
 千平銀平  
 市川實盛  
 近江原氏佐木  
 妹崎山芝六  
 スベテ世話時代  
 ツカヒカタ澤山  
 ナル頭ナリ



初段

大序 豊竹 若右夫  
 中 同 伊豆右夫  
 口 同 鐘右夫  
 切 同 此右夫  
 武段目 中 同 十七右夫  
 口 豊竹 若右夫  
 切 同 鐘右夫

三段目

豊竹 若右夫  
 常右夫

口 同 伊豆右夫  
 奥 同 若右夫  
 中 同 鐘右夫  
 切 同 若右夫

四段目

口 豊竹 此右夫  
 中 同 十七右夫  
 切 同 若右夫

五段目

豊竹 若右夫

鼎新軍談 諸葛孔明の頭ナリ

細人亀屋平助此頭薄雪首木

民部 近江源氏御酒所守

蘭者有甚義貞ナゾニ也フ

此外親父頭ニ勘作寅王

白太史政宗實威定之進鬼一

敵役ニ稀代樋口李海坊佐兵衛

目光勘平大傷カクハニ五郎頭立役ニ六

若男トテイロク 有由良之助ニ部甚外

サマ〜有トモ紙不足故斯ニ畧



祇園祭禮信仰記

此下東吉の頭

若竹東三郎思

珣高是ヲ打ス

細ユ人

亀屋

利助

是都

高臺寺

大岡様の木像ヲ

遷セシトナリ目

ハ玉眼ヲ入



同松永大膳此頭

細ユ人亀屋利助

是ニ代前若竹

伊三郎

コノニニテ

打セツカラ

今ハ松永

ヲ白クぬり

て巻くも

四段目ハ首

は身下り席ノ切是を

多けれハ敵役のやあ

伊三郎も身下りるる



倭假名在原系圖

奴蘭平の頭細ユ人

亀屋利助是若竹

東二郎の思付之而打セ

竹平坐團七頭ヲ少シ

遠ヲ打シケレトモハナバダ

悪シマダク、豊中ノ産ニ

名有頭アレド毎取メ有

後ニ不出



右倭指理丑十二月廿日寅卯三年秋之初此若竹

東二郎城田信長此下是吉の役を悉く右若竹の人形頭

系有是寺太周様の肖像ヲ細ユ人ニ寫シ此題トシテ

若竹伊二郎松永大膳の役恩のやうなる頭を打セつても

作人形の頭トシテ遠シキ事ニ此倭若竹の所

觸るを求ル豊中林麻を主と改名して御所殿目をお初らる

修しを精有、今の林麻を主と改り、いふも能い事

ありわらぬを主がゆへに右林麻を主の目と改り此

あり宝曆九年卯三月二日初日

○ 兒源氏 賞塚 五段續

四目弱を主場金付がを、然びらうと張りてん事あるとも、  
いふ不介は是系を主君を主と改りて此産豊中十七を主人形



下井小糸御印戸肥前守居く初同年八月十官初日

○浪花丸金鶴 世治津福理より帷子衣裳表うんをん  
緒張のつんをよして花やうふきとも中入る常衣筑前茶椀

一七二世一代一彦引紙同年十二月七官初日 ○先陣浮例巖

此付 此付豊中十七右主御戸より為る ○横姫賦姫椀

宝曆十年辰三月十官初日之同年八月十官 ○根津國長柄

人柱式夜目同年十二月十官 ○祇園女御九重錦 五辰續

此新津福理横為根平を為の態整物格より西陣一初津福理之  
三辰目柳の太舟舟車の寄せ線丸の小人形花道をひくうらりして

をかりて宣ふ是若を主場あり此の年大入せし宝曆十一年

乙二月を主御戸同次多砂の能人形出をい足強向して粗衣の  
太席とちなる宝曆十一年二月十官初日 ○三好長慶礎軍記

五辰續同年宝曆十官初日 ○峯姫松豊繼五辰續 此付

泉屋平多由より八重右主と改名一好く出座又枝芝居連世と主

賀志主依後右主豊松豊五辰同弥三辰藤井小三辰京石垣

芝居より ○洛陽いさご念佛といふ新津福理をお初と徳主

跡よりのぼる宝曆十三年未正月官初日 ○藤原秀郷田原

系圖 當正月九官出解之芝居より火出芝居跡より教焼

並右傳の名一坐を二ツふらうら京陽へ行同年四月芝居並右傳

十官芝居類焼して多根弄新地芝居より一官三辰目まで

切八重右傳して豊中筑後極替く脚よ出る此の年大之此より

道取堀豊中芝居の表並右傳進物の事有教志志す大坂中を

移りよて賣あましく初め事之同初より正月十九官より ○祇園

女御九重錦 中村の堂 豊中苗躬 同年九月十八官初日 ○曾根弄模樣

此降瑞理いか初徳多末をござりて此頃京越掛川より  
草屋長吉門二十八日信徳をわらん十日をござりて心中  
ありしを右降瑞理より西側新降瑞理とあり同年九月  
新芝居多結成館一逆傾堀入り九月十日初日○人  
丸萬年基五降續物式之由也○千歳豊松元五郎  
○公病豊松茂子○三島豊若井東二島成館一  
或三妻降瑞理をゆせ出きし之拾石取紅始り丸山の降  
御殿の降右秋年汝程言を降瑞理とあり切古降瑞理  
身取りて終り同年十二月廿初日○番協忠之紅梅履  
五降續此時約をまじりて同日十月廿初日  
○官軍一統志五降續當九月十二日豊井誠若松死す年  
八十也其折一いふも一元祿の頃より芝居自具あり

室小松に降く芝居ふらん昌とあり幸梅の程をうらむい  
し丸也豊竹誠若松八十四一音院本覺隆信日壽居士中  
寺町中經寺といふ法花寺の石碑を幸年号改元ありて  
明和元年申十月廿初日誠若松逝きとあり○娘景  
信八島日記是ハ大佛殿万代礎といふ降瑞理の増補之  
序切林麻右丈二ノ切十七名丈三ノ口此名丈二ノ切鐘右丈四ノ口  
此名丈二ノ切豊井誠若松○若松の遺り出語り若松  
礎右丈とあり西芝居く出座同年宣十月十七日初日○公は  
款義臣魁以付約をまじりて若井東二郡此名丈の  
行同二年酉三月十六日初日○志死し白旗軍記五降續  
同七月廿五日初日○内助子柄測當八月晦日没りて芝居  
相續りりぐぐ豊井誠若松の昔より相續

世に終るべき人なり

